

各地の音楽活動

北海道

八木幸三

札幌交響楽団（札幌）は今年もコロナ禍の影響で、出演者、曲目などの変更はあったものの、定期演奏会はほぼ予定通りの開催ができた。昨年との大きな違いは、海外アーティストが多く客演し始めたこと、若手指揮者、団員の活躍だろう。まず、1月定演では、H・スダーンがシューマン／交響曲第2番を躍動的にドライブ。フィンランド出身の指揮者P・インキネンが北欧作曲家の作品を並べ、骨太な演奏を聴かせた（3月定演）。ヴァイオリニストで指揮者のD・シトコヴェツキーが弾き振りにより、自らの弦楽合奏編曲による「ゴルトベルク変奏曲」を聴かせ作品の魅力を引き出した（6月定演）。巨匠O・カムがオール・シベリウスで17年振りに札幌をドライブ。「レンミンカイネン組曲」などで北欧の幻想的な物語を十全に伝えた（9月定演）。コロナ禍で足踏みをしていた首席指揮者M・バームルトが10月定演に登場。定演としては久々の札幌合唱団と共にハイドン「戦時のミサ」を戦争の無い穏やかな礼賛を思い描きながら敬虔にドライブさせた。客演アーティストも多彩で、A・ケフェレックがモーツァルト最後のピアノ協奏曲第27番を深遠なピアノイズムで聴かせ（5月定演）、ヴァイオリンの女王とも呼ばれるV・ムローヴァが、内省的な深みのあるショスタコヴィチのヴァイオリン協奏曲第1番を圧倒的存在感で奏でた（11月定演）。日本人アーティストもヴァイオリニスト山根一仁、フルーティスト工藤重典、そしてベテランピアニスト小山実稚恵などが華を添えた。4月から正指揮者に川瀬賢太郎が就任。函館市出身の若手ピアニスト岡田泰とのラヴェル「ピアノ協奏曲」や、サクソフォン奏者の上野耕平、道内出身の打楽器奏者石若駿らと共に吉松隆「サイバーバード」を躍動感溢れる演奏で聴かせた。昨年からの登場した20歳代の松本宗利音も新・定演などで澁淵と指揮をした。また、コンサートマスターに会田莉凡が就任。彼女を独奏に据えたドヴォルジャーク「ヴァイオリン協奏曲」では堂々とした演奏を聴かせ、田島高宏とのコンマス二人体制は実に頼もしいものとなった。

昨年は開催途中でコロナ感染により中断した国際教育音楽祭パシフィック・ミュージック・フェスティバル(PMF)は、今年無事全日程を終了することができた。オープニング・コンサートは3年ぶりに20カ国・地域から選ばれた52人のアカデミー生とウィーン・フィルやベルリン・フィルからの教授陣を含めたPMFオーケストラが、今回初登場のK=D・マズアを指揮者に据えて、キウ出身の作曲家V・シルヴェストロフの「讃歌-2001」などを演奏。その気高い響きで不安な世情に光明を差した。教授陣による室内楽コンサートではR・キュッヒルをはじめとするウィーン・フィル弦楽奏者のお馴染みの顔が久々にステージに並び、PMFのマスコット・ガールの存在のS・ウィリス(Hr)やF・シンドルバック(Pc)などベルリン・フィルの管・打楽器教授陣による楽しい演奏が繰り広げられた。PMFアンサンブル・セレクションでは、躍進めざましいゲストアーティスト金川真弓、上野通明、北村幹幹によるブラームス「ピアノ三重奏曲」第1番が息のあったアンサンブルで雄大なロマン性を見事に表出。アカデミー生によるアンサンブル演奏会では、プロコフィエフの「五重奏曲」で原曲の舞踊音楽の情景を想像させる秀逸な演奏が聴け、全国の交響楽団首席奏者を中心としたセクションリーダーとPMFアメリカ教授陣によるアンサンブルでは、洗練された「ゴルトベルク変奏曲」が聴

けた。ホストシティー・オーケストラである札幌は、マズアの指揮、PMF教授のD・マツカワの独奏で、モーツァルト「ファゴット協奏曲」を演奏。GALAコンサートでは、世界的に躍進がめざましい指揮者L・シャニがPMFオケを初ドライブ。プロコフィエフ「ピアノ協奏曲第3番」では、小曽根真のパワフルなピアノにシャニが管弦楽を柔軟にコントロールさせ、ブラームス「交響曲第2番」も抑揚感溢れる音楽を構築し、そのカリスマ性を発揮させた。

秋口からコロナ感染の第8波に見舞われたものの、音楽会は観客数制限が解かれ、多い日には3つほどの公演が重なるほど音楽会数が増えた。オペラでは、道二期会が3月に「ガラ・コンサート」、11月には上演が希な『皇帝テイトの慈悲』全2幕を2日間公演した。LCアルモーニカは1月にチレアの『アドリアーナ・ルカヴルール』を道内初演し、8月には『泣いた赤鬼』など邦人オペラ2作品を同時公演し、両団体の意気込みが感じられた。

声楽ではソプラノの陣内麻友美がテノールの中嶋克彦と共に英・伊国のバロック音楽やバリトンの中原聡章と共にカンタータ『アポロとダフネ』を中心としたヘンデル作品で精力的な公演を展開、超ベテランの館圭子は「歌いつづけて60年」と題して、日本歌曲でその健在振りを示した。道教育大准教授の大久保光哉は、スウェーデンの作曲家H・アルヴェンと恩師畑中良輔の作品を工夫を凝らして公演し、ソプラノの中田友紀は二胡奏者遠山夕希子と相性の良い二重奏を、針生美智子と一織久美子によるソプラノデュオ「ムジカ・ソアヴェ」も豊饒なハーモニーを聴かせた。「ミルテの会」が「君は花の如く〜シューマン夫妻に捧ぐ」と題して、ロベルトとクララのロマン溢れる歌曲などを聴かせ、日本シューマン協会札幌支部も「クララの誕生日に寄せて」と題して3つの歌曲集が歌われた。ピアノの影山裕子を中心に7年前より開催されている「楽興の時」シリーズの特別演奏会が多彩なプログラムでおこなわれた。声楽家を中心とする「ミトロムジカ」は5月にオペラアリアを中心に、10月にはロッシーニ作品、12月は『ジャンニ・スキッキ』などオペラ作品への興味を高める公演をおこなった。ピアノでは、今や中堅どころとなった渡部美路と浅沼恵輔が、それぞれラヴェル作品を中心にリサイタルを開催。「道銀ライラックコンサート」では、徳田貴子がラフマニノフのピアノ協奏曲第2番、鎌倉亮太がラヴェルのピアノ協奏曲を札幌と共に見事なアンサンブルで聴かせた。今年特に印象に残ったのが北見市生まれ若干19歳の本堂竣哉で、「ゴルトベルク変奏曲」を卓越した技巧と推進力のある音楽性でじっくりと聴かせた。器楽ではピアノ三重奏と弦楽四重奏を多く聴くことができた。札幌での新進演奏家育成プロジェクトリサイタル・シリーズで初めてピアノ三重奏団が登場。札幌ヴァイオリニスト赤間さゆらをはじめとする「トリオ イリゼ」がブラームスなどを演奏した。安永徹のヴァイオリン、市野あゆみのピアノ、さらに札幌と札幌の弦楽奏者による室内楽ラヴェルのピアノ三重奏曲やヴェーベルンの弦楽四重奏、第6回「シューマニアード」でシューマンのピアノ三重奏曲、「ピアノトリオのひとつときVol.8」でメルティヌーヤJ・クラなど珍しい作品が聴けた。川村拓也のヴァイオリンなどでシューマンやメンデルスゾーンのピアノ三重奏曲、鈴木秀美のチェロなどでブラームスのピアノ三重奏曲、さらに安井耕一のピアノなどによるハイドンのピアノ三重奏曲やモーツァルトなどのピアノ四重奏曲が楽しめた。3年ぶりにダネル弦楽四重奏団や毎年定期公演をおこなうカルテット・エクセルシオが上質の室内楽を聴かせた。結成10周年記念コンサートをおこなった「ムジカ・アンティカ・サッポロ」が2日間にわたりバッハの管弦楽組曲やヴィヴァルディ「調和の靈感」などを連続公演。山本泰子を中心とした12人の弦楽合奏団がヴィヴァルディの「四季」全曲とピアソラの「ブエノスアイレスの四季」という興味深い組み合わせの公演をおこなった。札幌音楽家協会は創立60周年記念演奏会を室内楽、ピアノ重奏、オペラハイライトなど、総勢60人あまりの出演者でおこなった。